

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第469号 2021年4月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

He can play the piano well.

忠谷 真有子

「子どもたちの目線が変わったように思います。」

5年生の外国語の学習で、自分や他の人ができることやできないことを紹介する学習をしました。

第一時で教職員が上手にできることを映像で紹介しました。一人目は副校長先生。スポーツが得意なので披露してくださいました。折り返しです。とても繊細な作品に驚きの声があがりました。二人目は二年生の時の担任。バスケのスリーポイントシュートを華麗にきめてくださいます。先生が得意なことを知っていたので「やっばり！」ととても嬉しそうでした。三人目は今年度異動されてきた調

理員さん。この方は音楽大学のピアノ科を卒業されているので、ピアノで今大人気のアニメの曲を弾いていただきました。

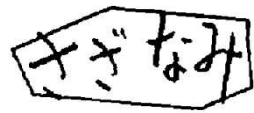
ときには誰も調理員さんを知らず、その上でできることを予想しました。「もちろん料理はお得意だと思う。」「サッカーかなあ。」「ダンスができそう。」

わくわくしながら映像を見て、みんな心底びっくり。「素敵!」「どうして音楽の道ではなく調理のお仕事をされているのか知りたい。」「お話してみたい。」「子どもたちから声が湧き上がりました。そして、その日の給食の返却の時間

に作業場におられる調理員さんに向かって「ピアノ聞きました!」「お上手ですね!また聞かせてください。」「などと口々に声をかけていました。調理員さんとお話ししたくて給食室前で待っていたり朝の出勤時に声をかけたりする児童も増えました。

そこで冒頭の言葉です。調理員さんとお話をしたときにおっしゃっていました。授業の後、子どもたちの目線が自分をとらえていると思うようになったということ。私にとつてはとても嬉しいことでした。外国語の学習は、もちろん外国語を学ぶということが大切です。しかし私は学習を通して、学校生活が彩豊かなものになってほしいと思っています。友だちや教職員と外国語でやりとりする中で、知らなかった面に気付きもつと知りたい・関わってみたいと思うこと。これまで見えていた世界より少し視界が広がったり見え方が変わったりすること。後日談ですが「他の調理員さんのことも知りたいです。」という声があがりました。子どもたちの世界は学習を通して日々広がります。

(京都市立御所南小学校)



▼単元の終わりに次の文章を書いた子がいた。「ぼくはこの勉強で初めて説明文の読み方がわかりました。説明文はややこしくてむずかしいと思っていました。知固有種のこと、知らなかったの、初めは、読んでもわからなかったけれど、みんなの発表やグループの話し合いやノートを作っていくうちに、文章にきちんとしたまとまりがあることがわかりました。ぼくには、よくわかる勉強でした。学習をしたことに満足し、勉強の仕方を発見した喜びをこのように表現したのである▼この子にとって、文章の読み方が分かったのはこの時が初めてではない筈である。にもかかわらず、この学習を新鮮なものとして受けとめているのは、言葉の意味や働きに気がついたのである。▼この子が理解できる。しかも、友達の発表やグループ学習がその契機になっている▼言葉は人によって作られると同時に人をつくるものである。言葉から何かを発見し、自分のものにするを通して、意味や働きに気づいていく。話し合いやノートを通して考える過程で、文章を読む力が育ったというのを伝えたかったのである▼この子にとっての次の学びは、言葉を使いこなす表現へ生かすことである。獲得した言葉の力を生かしながら、拡げていくよう支援や場の設定により力が伸び、ひとまわり大きく育つ芽を感じた。(吉永幸司)

トップニュース
弓削 裕之

今年度は、一年生を担任させていたことになった。京女小学校の一年生は、毎年「親子日記」に取り組んでいる。「親子日記」とは、一年生が書いた絵日記に、保護者、担任、校長でコメントを書き取り組みだ。まだひらがなを習っていない時期の日記は、保護者の聞き書きでもよいことにしている。

先日、バス停までお迎えに来られた保護者の方と話をしていた時、親子日記の話題になった。「同じ出来事について書いていても、子どもによって選ぶ話題が違う」という話になり、ふと「これまで日記には、どんなことが書かれていただろう」と気になった。職員室に帰ってから、さっそく保存していた過去の親子日記を開いてみた。

〈入学式の日記より〉

○きようは、たのしみなにゆうがくしきです。おかあさんおとうさんは、おめでどうといつてくれました。
○にゆうがくしきのいきしのバスでいAちゃんとおともだちになれてうれしかったです。
○らんとせをせおつていくのがたのしみでした。くつばごをさがすのたいへんでした。
○にゆうがくしきのひいてんきで、チユーリップとがんせき(岩石)がきれいでした。
○ゆげせんせいとたんごのせんせいでうれしです。くばんがとてもすてきでした。

○ひとがたくさんいてびつくりしました。ときどきしたけどがんばりましたよ。
○わたしはにゆうがくしきでおおきなこえでおへんじをしておかあさんにほめられました。
○もんでふじのこちゃん(京女のキヤクター)がいてくれたのでうれしかったです。おうたがともきれいでした。
○おねえさんおにいさんろくねんせいになりました。だつてとてもかっこよかったです。

同じ入学式を経験していても、子どもがトップニュースとして切り取る場面はそれぞれ違っている。多くの子は、いきなり鉛筆を持って一人で書いたわけではないだろう。家庭での会話が聞こえてきそうな、あたたかい日記ばかりだ。

コロナ禍ということ、今年も在校生の参列はなかった。一年生と手をつないで入場するはずだった六年生が、代わりに何かできないかと、折り紙で桜の花を折り、「にゆうがくおめでどう」「ようこそようしよへ」「いっしょにがんばろう」などとメッセージを書いてくれた。その桜は入学式の日、一年生の机の上に置かれ、ドキドキしている新入生の心を和ませた。さらに、担当の先生の計らいで一年生の胸ポケットにしまわれ、一緒に入学式に参列することができた。きつと今年の日記には、六年生がくれた桜の花が登場するだろう。日記が提出されたら、六年生にも紹介しようと思う。昨年、五年生で担任をした子どもたち。少し照れながらうれしそうに笑う表情が目につく。

(京都女子大学附属小学校)

大切にしたい言葉
箕浦 健司

「書き表し方を工夫して、経験と考えを伝える文集作文を書くこと」「大切にしたい言葉」(光村 六年)

本単元の学習活動は、これまでに会った言葉や想起し、その中で自分の「座右の銘」と呼べるもの、その理由、エピソードをまとめるというものである。単元導入で、本単元で書く作文は、卒業アルバムに載せる旨を告げたところ、子どもたちのやる気は俄然高まった様子であった。卒業を目前に控え、すでに各教科の学習が六年間の「まとめ」である意識をもっている子どもたち。誰もが意欲を高め、学習に入ることができた。

これまでの生活の中で実際に出会った言葉と、そのときの経験と結びつけて書くことができる子もいれば、難しい子もいる。そこで、教師が「名言集」等の図書や印刷したものを用意し、その中で自分の経験と結びつくものを選ぶという方法も提示した。また、いわゆる諺や「名言」と呼ばれるものに限らず、生活の中で出会い、大切にしたいと思った言葉も当然良いと言ったことを伝え、学習を進めた。

以下、ある授業での一場面。
「先生、『行つてらっしゃい』でもいいですか。」
「もちろん。それは、ご家族に言われた言葉ですか。」
「はい。毎日言ってくれたことに感謝する作文にしようと思います。」

「ご家族は、とても喜ばれるでしょうね。」
この一年間を振り返り、「書く」活動については、特に「力 推敲」に力を入れてきた。互いの作文を読み合い、良さやアドバイスを、付箋を使って伝え合うことを繰り返してきた。本単元でも、下書きが完了した後、二色の付箋を手に互いの作文を読み合い、良さを伝え合う活動を設定。これまでの経験もあり、スムーズに進んだ。繰り返し取り組むことが力になるということを実感することができた。

また、卒業アルバムに掲載するというところで、保護者にも協力を依頼し、下書きをチェックしてもらった。その結果、家庭で大きく書き直してくる子もいた。こうして友だちや家族の支えも得ながら、身につけた力を発揮して書き、作文を完成させることができた。卒業文集にふさわしい、まさに集大成と言える作品が揃った。

以下、子どもの作文の抜粋。

「……小学校低学年の時、初めてのピアノの発表会があり、一生懸命練習した結果、本番では何もミスすることなく終えることができました。しかし、二回目の発表会のときには気が緩み、あまり練習をすることなく本番を迎えてしまい、案の定本番でも何もミスをして、散々な結果でも後悔しました。その後、高学年になり、「まかぬ種は生えぬ」という言葉に出会いました。……私は、努力をせずに悪い結果が出て後悔するよりも、日々努力を重ねて後悔しない、自分にとってよい結果が残せる人になりたいです。『まかぬ種は生えぬ』これを、これから座右の銘にしたいです。」
(長浜市立南郷里小学校)

卒業文集
「書くこと」の集大成
 杉澤 周一

市内の小学校の幾つかを担当し、授業を観て気づいたことを伝えて三年目。昨年度末とこの新学期に卒業文集について六年の担任と話し合った。一年を通して卒業文集づくりを進めてみてはどうかと。

一つには、学校生活を書くことでふり返り、大切にするため。また一つには、卒業文集を国語科「書くこと」の力の集大成と捉え、付けてきた力を発揮して学びの成果を示し大切にするため。

綴じるのは、六年の教科書で学習する際に書くものから選択。教科書以外で、六年間をふり返り書き残したいもの。これらを年間を通して計画的に位置づけ、基礎基本、および五・六年の目標・内容に照らし、付けてきた書く力を発揮する機会に。また、個々の子どもに不足があれば力を補う機会に。この意義を教師と子どもたちとが共有し目指す。例は次の通り。

- 【書くこと】
- 学習指導要領から引き出したキーワード。文集を書く際のチェック項目として示す。
 - 「一・二年」・語と語や文と文の続き方 内容のまとまり・順序
 - 「三・四年」・考えと理由や事例
 - 内容の中心 段落分け
 - 「五・六年」・簡単、詳しく 事実と感想、意見 引用 図表やグラフ等
 - 「基礎基本 情報活用能力」
 - 「主語述語 接続詞」

・はじめ 中 おわり
 ・相手や目的、意図に応じて、選択、分類、関係付けにより伝えたいことを明確に。

【綴じるもの 六年の教科書】

- ・物語文(物語学習のどれか一つか最終教材の感想、或いは読書感想文コンクール作品)
- ・意見文(説得力) ・詩や俳句、和歌の創作作品

【綴じるもの 教科書以外】

- ・お気に入りの場所(校舎・校庭)
- ・ホットメッセージ(級友相互に素敵な面や感謝を。家族にも。)
- ・自分の成長(キャリア教育)
- 一年、四年の自分と比べて
- ・ある日常の一コマ(授業編・学校生活・活動編 家庭、他編)
- ・行事作文 ・各学年の思い出(やった 大失敗 笑顔 涙 等)
- ・図工や家庭科、書写作品の説明や自己評価 各教科、特別活動等で書いたもの

(これらを清書しその都度、ファイルに貯めて三月に製本。学級共通の頁と合本もできる。)

各学年末の文集にも応用できる。

一年を通し、大切な文集に残すつもりで授業に臨むと授業を大切にすることは。授業以外の題材では自分やまわりをふり返って何らかの価値づけをし今後の成長につながるかもしれない。これらにより、書くことよさを自覚し、書いておきたくなる、書くことを厭わなくなる素地ができるかもしれない。学びに向かう力の醸成でもあるか。このような願いもある。

(東近江市教育委員会 学校教育課)

学年当初の
自己紹介で国語開き
 蜂屋正雄

毎年、学年はじめには「自己紹介カード」を書かせ、それを元に自己紹介をさせることが多い。今年度の国語科の教科書(光村四年)では、言葉の準備運動(話す聞く)「こんなところが同じだね」という単元で、友だちと自分の共通点について話し合い、学級づくりにかけるような学習活動が設定されている。そこで、

自己紹介カードを書く。
 自己紹介カードを元に、自己紹介の文章を作文ノートに書く。
 自己紹介カードをメモとして使用し、みんなの前で自己紹介をする。

自己紹介を聞いて、「同じ」といえる項目を探す
 隣の友だちとどこを見つけてる。
 隣の友だちと同じところを見つけてる。
 という、学習活動を計画した。

学期初日に自己紹介カードを書き、2日目に自己紹介ができるように、作文ノートに話す内容を書くことを宿題に課した。自己紹介カードを構想メモにして作文を書く流れを考えた。モデルとして、担任の自己紹介カードと自己紹介の文を学級通信に載せ、子どもたちは、それを元に作文ノートを書いた。モデルには、自己紹介カ

ドに書いた項目についてすべて書くのではなく、2つ程度に絞って詳しく書くことよいこともアドバイザーとして、載せた。

自己紹介当日、子どもたちは作文を見ることなく、自己紹介カードをメモ代わりに自己紹介の発表を行い、好きなことや苦手なこと、どんな学級にしたいかを伝え合った。

発表が終わると、次の時間は「こんなところが同じだね」の学習。お互いの好きや苦手傾向を一通り聞き終わったら、隣の友だちと自分たちの共通点を出し合った。

隣の友だちとペアになって、「兄弟がいる」「算数が好き」「野菜が苦手」「習い事が同じ」など、まずは二人の共通点をたくさんさがした。たくさんさんの共通点が見つかったら次は、もう一つのペアと共通点を比べあって、4人とも同じ項目を見つけあい、感想を述べ合った。

子どもたちは、「はじめは好きなものとかだけだったけど、たくさん見つけられて面白かった。」「友だちの意外な好きなものがわかって面白かった。」など、いろいろな「同じだね」を見つけたことを楽しみながら、友だちのことを知り合う活動ができた。

これからは、他の教科でも、友だちの考えや意見と「同じところ」や「違うところ」を比べあひながら、考えを深めあえる話し合いへと発展させていきたい。

(野洲市北野小学校)

子ども参画による
目標の具体化
川那部 隆徳

「マスクをつけなさい」というかわりに「みんなマスク」と声をかけると、素直にマスクを着用する子が増えたとの学級担任からの報告。

昨年八月益明け、早々に夏休みを終了させ、授業を開始した。年度当初の臨時休業を穴埋めするための措置であった。

全国的に新型コロナウイルス感染症が拡大傾向にあり、滋賀県内でも新規感染者が増加している状況での開始となった。いつ、どこかの学校で感染者が発生しても不思議ではなく、それまで以上に感染に対する警戒をし、感染拡大防止を図る必要性から、「新しい生活様式」を定着させなければならなかった。

また、同時期、本校では、大規模改修の大部分が完成し、校舎がリニューアルした。きれいになった校舎を長く維持したいという願いがあった。

そこで、「新しい生活様式」をはじめ、学校における生活について、教師側からの投げかけだけでなく、子どもたちのアイデアを生かした目標の具体化をすることにより、一層の定着を図るとともに

子どもたちが参画する学校づくりを進めたいと考えた。

夏休み明けの初日、全校放送で、「相手より先にあいさつをしよう」という四年生の取組を例として、「お先にあいさつ」と銘打って紹介した。

他に、きれいになった校舎を維持するためには、マスク着用を促し維持するためには、等々について、そのキャッチコピーを取り上げる内容について、全校にアイデアを募集した。題して「はるひが安心生活」。

数週間後、個人から、学級から、委員会からの応募があり、約四〇点のキャッチコピーが集まった。それらの中から厳選し、次の七点に決まった。

- 【はるひが安心生活】
- ①(壁)あしあとときんし
 - ②(掃除) スミまできれい
 - ③(整頓) くつをそろえてイメーリアップ
 - ④(過)ごし方)
 - ⑤元氣スイッチ
 - ⑥(あいさつ)
 - ⑦みんなにあいさつ!
 - ⑧(新しい生活様式)
 - ⑨みんなマスク

「くつを揃えなさい」というかわりに「くつをそろえてイメーリアップ」、「言葉が悪い」に対し「ふわふわ言葉でつながろう」...

コロナ禍で我慢を強いること多い状況下、生徒指導上の指導において、教師と子どもとの軋轢が軽減されるとともに、子どもたちが互いに声を掛け合うことで定着を図り、より安心して過ごせる学校の実現を図りたいと考えたわけである。

全校放送で、「はるひが安心生活」を伝えたところ、早速、翌朝のあいさつの声がボリュウムアップした。打てば響く姿を実感した。その後、生活委員会や保健委員会等の委員会活動でも取り上げられ、活動が広がっていった。

年度末の学校評価には、「はるひが安心生活」は、合言葉での目標設定がよく、子どもたちに浸透している」との学級担任からの指摘があった。

キャッチコピーづくりの面白さ、口ずさみややささを支えとし、子どもたちは、自分たちの思いが学校の約束事に反映されていく小気味好さを味わったであろう。

今年度は、「はるひが伝統づくりプロジェクト」を進めていくことを子どもたちに宣言した。

(栗東市立治田東小学校)

編集後記

三月例会(四百六十八回)例会の提案は弓削さん(京都女子大附属小)

提案教材は「古典芸能の世界」語りで伝える(5年光村)提案「笑いの研究」落語台本を書こう」
落語台本を書くことの動機は、上方落語家・桂三扇先生とプログラミング学習の講師の先生との授業。落語に関心を持った子ども達に笑いの世界に導くという単元構成。古典落語「時うどん」の鑑賞や台本の読み。小咄の研究、落語の台本を書くという単元構成。6時間の授業記録と子ども作品をもとにした提案であった。落語について学習指導要領では「古典作品の内容の大体を知ったりすることを通して昔の人のものもの見方や感じ方を知ること」と示している。このことを指導書では、「言語文化への興味・関心を深めるために、能、狂言、人形浄瑠璃、歌舞伎、落語などを鑑賞したり、年中行事や地域に伝わる祭事などを調べたりすることもある」と示している。一方、教科書教材のリード文は「日本には、言葉だけでなく、物語を伝える芸能があり、昔から、多くの人を楽しませてきた。ここでは、落語の特徴を見てみよう」となっている。研究協議では、「時うどん」の面白さや「そば」や「小咄の研究」に向かう子どもたちの力を「落語台本」へ高めるには、どのような配慮や工夫が必要か等、単元の目標や学習活動について深めた。▼巻頭には、忠谷真有子先生から玉稿を頂きました。深謝。

(吉永幸司)